

西  
南  
太  
平  
記

沼尻絰一郎編輯

四号

上

10

15

20

25

A434  
5

沼尻絰一郎編輯 全二冊

# 西南太平記

東京 萬笈閣發兌

今般鹿兒島縣士族暴舉の儀ぎ付鶴ヶ岡士族動どう  
 静せいの摸も様よう御尋おん不ふ候こう處ところ右みぎは是これ迄まで動どう揺ようの為ため体たい更さらふ  
 見み認と不ふ致ぢ尤なほも私わが儀ぎ取とての大おほい義ぎ名な分ぶんと誤あやまる  
 可べき儀ぎ断た然ぜん無な一ひと同どう士し族ぞく中ちゆう萬まん一いつ方ほう向きゆうと誤あやまり候こう  
 節せつの死し力りきの限かぎり説せつ諭ゆをかへ取と鎮ちん候こう様さま可べ致ぢ候こう右みぎ  
 御尋おん不ふ付つき書しよ取とと以もつて御請おん申まを上う候こう也なり

明治十年三月十四日

松平親懷印

山形縣令三島通庸殿

山形縣令三島通庸殿

四編上二一

48-7788



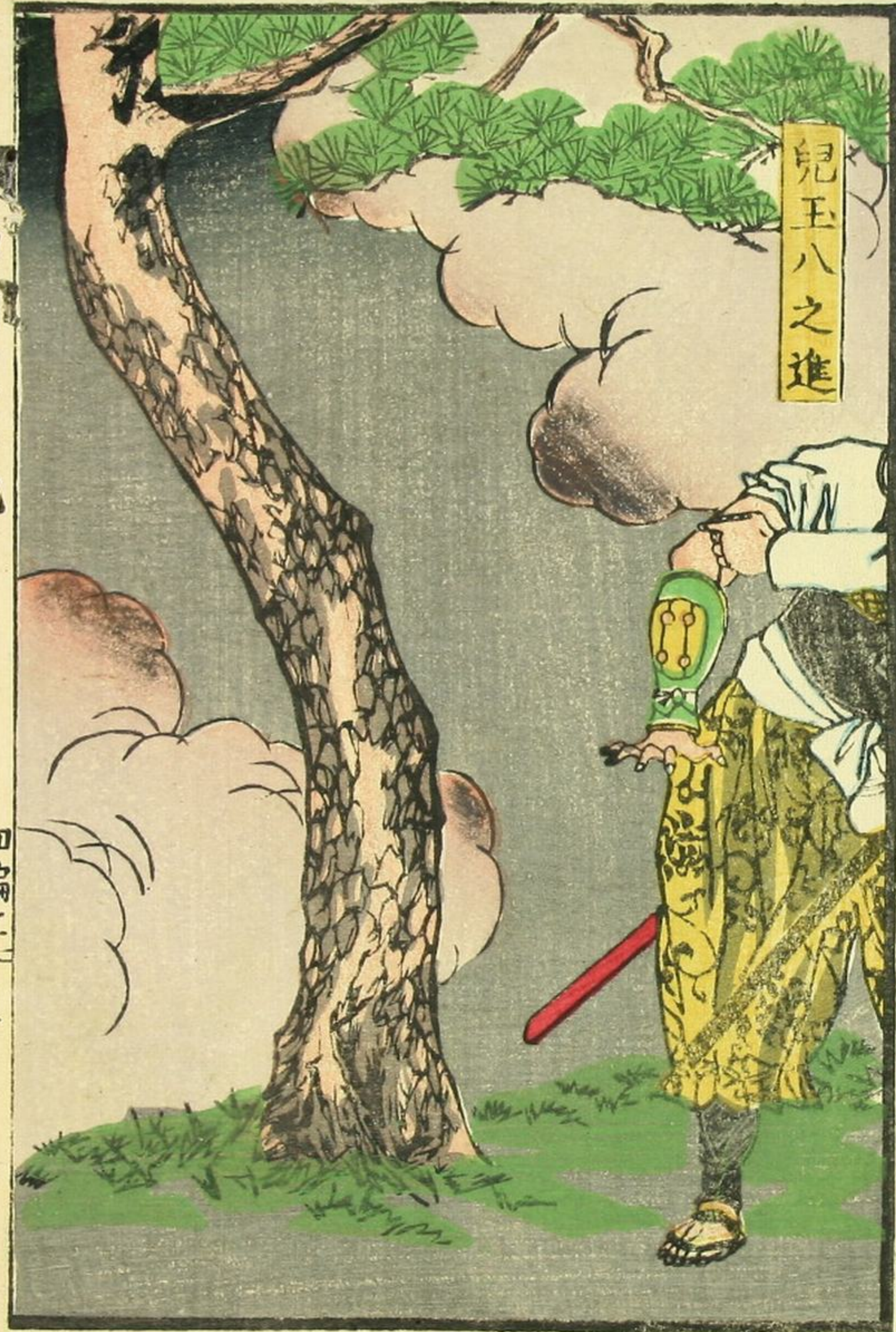
織田啓助



貴島卯太郎

能勢十九郎

能勢之虫



兒玉八之進



邊見十郎太

別府新輔

八之進

正四位 鷲尾隆聚



第七之頁

西南太平記 四編卷之上

東京 沼尻絳一郎編輯

第七回

警部 抜刀隊 田原坂 激戦

并 野津少将 桐野利秋の隊 攻撃

明言あきげんふして反復はんぷく辨論べんろんの輕舉けいきよふ出いででざると鳴なせり  
 一時いちじを跋扈はくこ強梁きやうりやうまるす不す過とぎとざるとあり然しかれども  
 若もし兇徒きやうととして西海さいかい中ちゆう國こくの蟠ばん結けつ一いつ互ごに連衡れんこう合ごう  
 徒と一時いちじ紛ふん起きするが如ごとき支しあはらむと或あるひ

兇焰の四方に散乱し遂に天下の大事に至るべきも未だ知る可くしざらるり然るに過る五日官軍河内口の戦ひに福原大佐の賊軍へ馳入り奮激するに遂に腹へ數ヶ處の疵を負ひ一時戦地を退きしといふ又東京より各地へ出張を命ぜられ既小東京鎮臺歩兵第一聯隊第一大隊同第二聯隊第一大隊其他數隊神戸へ向け陸續として出發せられたり又海軍十等属加藤謙三郎に長崎へ出帆同

少尉補安住保弘同西季重の兩名并に少尉補岩永繩矩も神戸へ出帆又海軍水兵取締の爲に海軍少尉補久武禎蔵同西直資の兩名に神戸へ出帆致さしまた陸軍中尉二品親王伏見宮に山縣參軍に隨行を仰せ付けらるる九日出帆の瓊浦丸あり九州へ赴くもたり陸軍省にて此程新に雇看病方五十名程を召募せしむる是を神戸の病院へ近むる官軍の怪我人多數を送られたるが其疵所等ハ先

年佐賀熊本萩等の節より余程大疵等もあ  
るよりあまを厚く看病を施さるるあり借  
賊徒ハ大坂府不忍びりつる者ありつるや偽策ハ熊  
本城ハ既不落城不及びり杯稱るものあり大  
坂市中玉江橋京町橋勒堂島万字ヶ辻の四ヶ所  
へ左の張札を掲げたり

今般貧民救助の為め兵端ヲ開たり隨テ諸稅  
罰金等ノ律ヲ廢ス仍テ今日ヨリ安堵シテ營

業ヲ守ルベシ

但シ此布紙破捨スル者ハ正ニ嚴罰可申付  
モノ也

第十年三月

新政大都督出張課

大坂へ入込む者は是非を論ぜず檻倉入りふるまは  
れ彼方此方小有馬藤太同志の者忍びたり何  
密謀せしとく穩らあらず西京東京不寄留の鹿  
兒島人も拘引多かりしが又彼の地の景況ハ官軍

三道さんどう不な分わかれ大おほ山やま少せう将しやうハ山やま鹿か口くち又また向むかひ野の津づ少せう将しやうを  
 吉きち次じ越こへ三さん好こう少せう将しやうハ田た原げん坂さかへ向むかつて進しん軍ぐんせられ  
 たり此この田た原げん坂さかハ要えい害がいの地ちるまこと地ち形けいハさし高たか  
 くもあし糸いとど或あるハ下くだり或あるハ上あがり坂さかるるが故ゆゑ不  
 守まもる不な利りありて攻せめる不な甚せまど利りるまきところたりを  
 めりく昔むかし時ときより此この所ところを腹はら切きり坂さかと云いひ若わく敵てき攻せめ来き  
 り此この坂さかを乗のり取とる不な至いたら不な防ぼう戦せんするよりかゝるく  
 賊ぞく軍ぐんハ必かなら死しと極きまめて固こ守しせりと云いふ儲たくわも三月十

一日いちにち午ひる前まへ六む時じより官くわん軍ぐんハ吉きち次じ越この右みぎ翼よくなる臺たい  
 場ばを攻せめ落おちさんと進しん撃げきし漸やうく不なして之これを乗のり取とり  
 たるが怪あや我われ多おほく賊ぞく軍ぐんハ其その前まへ面めんより砲ぱう撃げきしたり  
 けるがその勢いきりハ慄おそ悍けんより之これが為ため官くわん軍ぐん打  
 立たてられて賊ぞくハ臺たい場ばを不な取とり戻かへさんと必かなら死し不な激げき  
 戦せんし賊ぞく兵へい死し傷やう多おほりり官くわん軍ぐん一いつ時じハ苦く戦せんるる  
 也なり終つひ不な臺たい場ばハ取とり戻かへさしたり田た原げん坂さかの方かたも  
 官くわん軍ぐん大たい拳けんし賊ぞくの臺たい場ば二ふたヶ所ところを攻せめ落おちして進しん

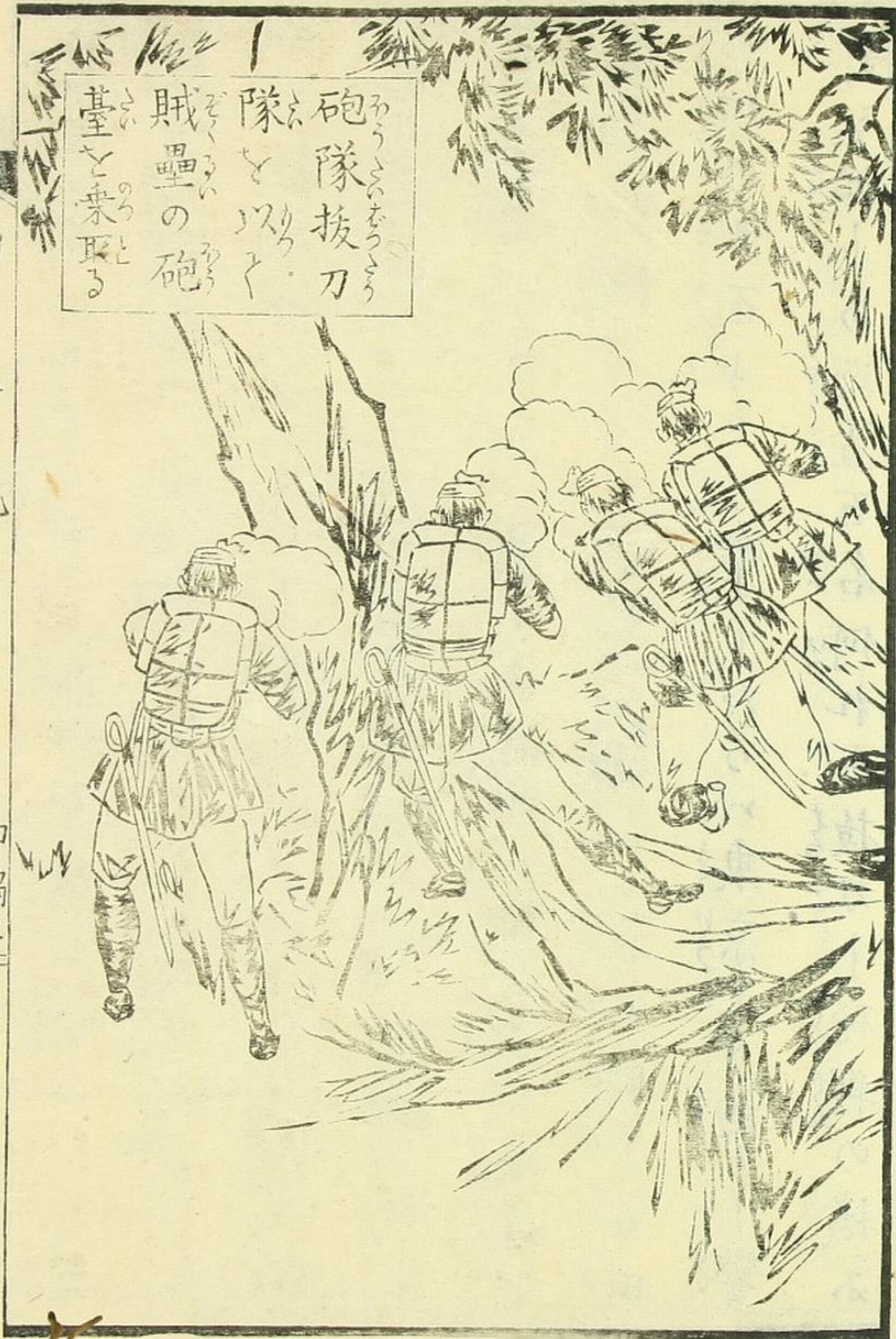
山南本記

四編上



撃せんせとせーが賊軍の之とて得たりと計るふ  
其の跡を断切りて吉次越の方より四十人位づ  
切り込も三尺の白刃を振り舞一群る官軍の中  
ふ馳入り當るを幸ひと切り廻るふぞ其坊り込む  
毎又官兵二十人と切斃す茲ふ於る官軍死傷夥  
多しく互ふ必死の激戦ふ終ふ賊ハ臺場を取り  
戻したるが此時間ハ實ハ瞬息して賊臺を毀ち  
砲臺と築き替へるの際もるりりと其距離の近

きところハ双方その面と見認るふ至れりと入り  
亦山鹿口の方も同十二日午前八時より開戦官  
軍ハ岩村平山の両手より進撃一賊の臺場一ヶ  
所と乗り取りたるは賊軍ハ狭間より切込し兩軍  
頗る激戦す其勢ハ兩軍共大ひは激烈なりと獅  
子の如く又虎の如く互は鮮血の泉を流し息をも  
つぐは又戦ふあぞ官軍兵士のサーベルハ鋸の如く  
ふあり程手詰の接戦ありしが官軍ハ如何の策



西南六三已

四編上  
乙



西南六三已

外史画

畧やありけん退いと平山の臺場と守りたり岩  
 村の官軍ハ追々進撃あきんと十三日又用意あ  
 りて同十四日早天より官軍植木口と攻撃す右  
 翼の前面より賊の臺場と砲撃し終ふ数ヶ所と  
 乗り取りたり之が為め小賊徒ハ敗走して街道と  
 隔てて對戦し猶も官軍と襲んとせし時しも田  
 原坂の側面より攻撃したるハ東京より廻りし警  
 部と始とり巡查百名何れも抜刀し砲戦の機あ

乗トて賊壘小切込む之と抜刀隊と名づけたり此  
 時警部の手負ハ緒方維典加藤警部補戦死四名  
 手負十三名ありとらその進撃し賊徒と切靡け  
 たる手練小續いゝ兵士が銃鎗と以て賊を衝き  
 立てたる勢ハ流石慄悍無双の鹿兒島人も之を  
 視て恐るゝ色ありとら然れど賊ハよくその壘を  
 死守するが故又悉く殺し盡す非ざるを止ざ  
 るるありまゝ賊徒ハ頗る偽仁政と稱へて居るよ

夫等々思ひ付りせー彼の仕業と思ひせー大坂  
 府下京町堀三丁目同五丁目その他所々へ前号印  
 せー通の張札と出せーと大坂府下も何となく  
 穩々あらず彼の薩摩堀の具服渡世女主人のたに  
 る暴士族等が兩度の金談と相断り今度の事件  
 小付御國恩の為め左の通りの願面と差出せー  
 私儀不幸ゆゑと蚤く父母に離れ候者も御座  
 候此度西國の暴拳不容易事柄被為為腦

震禁候趣且つ段々の御諭達并承仕り私父存  
 生中天恩の洪大なりと毎々為申聞又本願寺  
 御注主様より勤王報國の事懇々御直論の  
 趣兼て胸臆小疊と能在此度の事件に付て  
 ハ男子に候りせめ御荷物運輸の與力も  
 可相成の處ありきん婦女子の義其任も  
 相當らば只々其不幸と歎息能在り候のこも  
 御座候曩小聖上當地御通輦の節小望外小

出夫不付ても父母在世不候は相扶け御  
行装を可奉拜者にと只管歎慨罷在候次  
第依てハ父母存生中頭髮の飾と要求買取  
貫ひ候と唯今不相成り熟考仕候へ無用の  
品柄不付之と沽却仕候て現今金百圓を得候  
分乍聊御兵備の万一不供一申度奉存候  
右志願御採用被下候は一ふハ亡父母の追  
恩とも可相成二ふハ私平生歎息罷在在り

候意哀も相貫き亡父存生中の教旨御法主  
様の御直諭の次第も相立私一ふとり歡喜  
至極不候間右申上候趣只々御採摘の程  
奉懇願候也

第三大区五小区薩摩寺堀

東之町第四番地女主平民

吳服高

高橋 たい

明治十年三月五日

大坂府知事渡邊昇殿

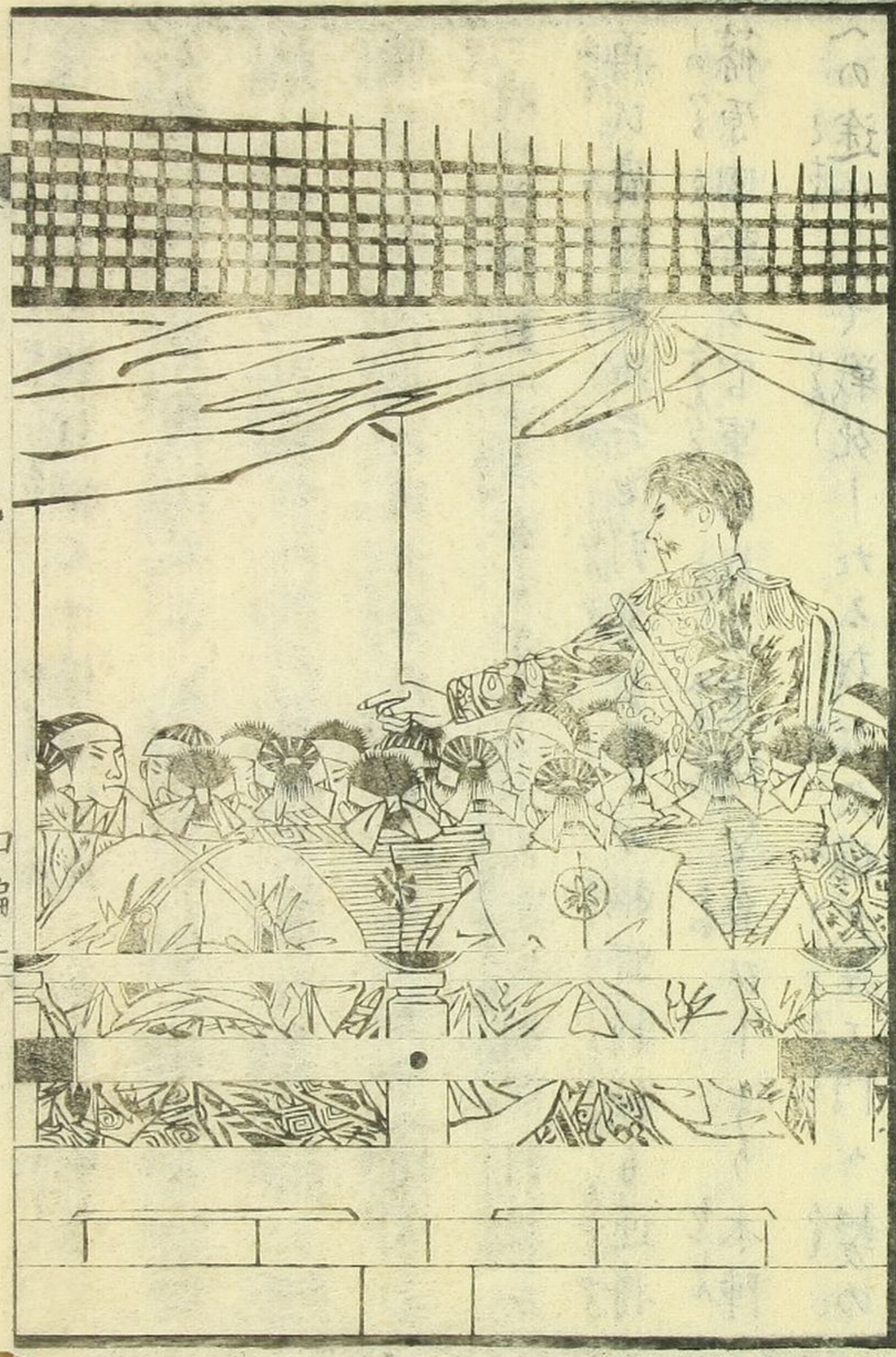
過日捕縛不就一有馬藤太の同志も高橋たいへん  
 談あり〜と風説ありけきを其府下不知る豪商々  
 るべ一斯く熊本城の今又依然として敵中にあり  
 て福岡邊あての種々の訛傳と云ひ觸一熊本城内  
 小あり横山中佐と與倉中佐の兩人も重傷を受け  
 たりといひ或は樺山の脱走して賊軍に入り一搦  
 と言ふ〜せ一は是れ策あるや賊軍ハ稍もすれを  
 襲撃せんとす既不或夜賊廓外の間道より城

内を襲ひ兵糧庫を放火したりと其城内入り  
 者ハ一人も帰り来らざるあり多分塵よあり一な  
 らん又賊兵ハ死傷頗る多き故賊徒中ふて之を取  
 付付一熊本近傍ふハ諸所ふ屯一數ヶ所の炊出  
 ありと雖も近頃又至りてハ金穀盡一と見へ暴と  
 以て掠め採り人夫少ハ賃錢を與へずと因て人民  
 ハ飢渴不苦〜と居ると又賊徒ハ大ニ疲勞為一た  
 りと見へ賊軍の大將桐野利秋ハ鹿兒島又帰り其

西南の戦

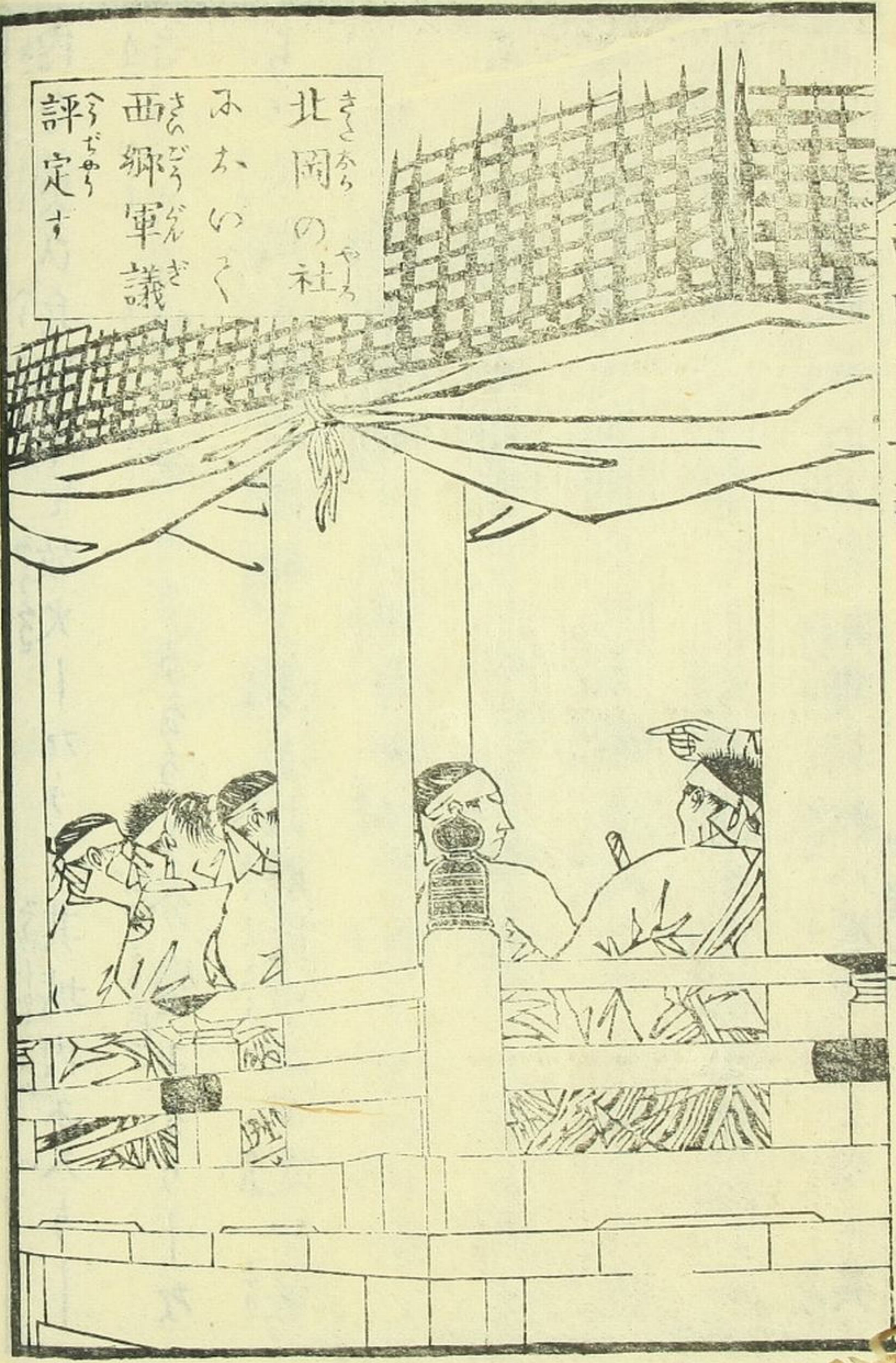
四編上

四



北岡の社  
 みかいく  
 西郷軍議  
 評定す

西南の戦



五

五

豫備せし士族を撰んで後詰と為させんと屯集す  
 る者の内ふ貴島卯太郎と殺害せんと謀るふ卯太  
 郎は辛くして逃あめせ二百名を募り豊後路は沸  
 騰せし故豊後の國大分の町も二月廿五日は焼失して  
 一時は其騷動一下方ありざりしが又逆將桐野利秋を  
 再び鹿兒島に兵と引卒せしむ桐野利秋も逆將  
 篠原國幹が官軍の爲に重傷を負ひしより本陣  
 への途中ふて戦死したる哉大久保久左工門が髮の

毛を鹿兒島へ持参して葬送を取り行へしとい皆利  
 秋の指令ありんや桐野の肥後路へ又進撃する官  
 軍も賊の大軍と聞より早くも是より劣らざる福岡よ  
 り毎日二大隊宛交代して疲労したる賊と抗戦さ  
 さんと用意ありし賊の大元師なる西郷隆盛は川  
 尻の本陣を花岡山の麓北岡郷北岡神社へ移し乗  
 馬ふて自らの日々縣下を奔走して頻りに人数を募  
 れり西郷の火薬を送る者の手筈が相違し賊より



鹿兒島紙幣と作り出—現ふ熊本の人足方へ拂ひ  
貸錢を是を用ひ—追々金が困る説あり賊を  
勞をと休むる違はく殊死—戰ふるべし

征討總督有栖川二品親王の告諭書左の通り

三月九日ふ陸軍卿山縣有明代理陸軍中將西郷從

道より陸軍一般へ達せられし

曩キニ鹿兒島縣ノ暴徒數百人嘯聚シ去ル

一月三十一日夜ヨリ二月二日ニ至ルマテ連夜

其縣下ニ右之陸海軍ノ彈藥ヲ掠奪シ同縣下

人心甚穩トラス是ニ於テ河村海軍大輔及ヒ

林内務少輔ヲ差遣シ其情狀ヲ訊問セシメン

トスルニ暴徒等兵器ヲ以テ其上陸ヲ拒ミ刺

へ其乘ル所ノ官船ヲモ奪ハントシタリ仍テ

空シク鹿兒島灣口ヨリ船ヲ廻セリ 天皇尚

或ハ其覚悟センヲ欲シ從二位島津父子及

ヒ西郷隆盛等ハ深ク國家ノ為メニ力ヲ盡ス

者ナルヲ以テ此時ニ際シ身ヲ挺テ以テ人心  
ヲ鎮撫セシメンヲ思ヒ勅使ヲ差遣セラレ  
ントスルニ豈圖ランヤ是ヨリ先キ彼等自ラ  
其名ナキヲ惡ニ東京巡查其他帰縣セル者數  
十名ヲ縛シ負ハシムルニ無根ノ偽名ヲ以テ  
シ強テ名義ヲ設ケ擧ヲ全國ニ傳ヘ恣ニ兵器  
ヲ携帶シ國境ヲ鎖シ已ニシテ關縣ノ兵ヲ擧  
テ熊本縣下ニ闌入シ官兵ニ抗敵シ其兇威ヲ

逞シクセントハ 天皇慈仁固ヨリ無事ノ生  
靈ヲシテ鋒鏑ノ禍ニ罹ラシムルヲ欲セスト  
雖也如此ノ形勢萬已ムヲ得サルニ付遂ニ本  
月十九日ヲ以テ征討ノ令ヲ發シ余ヲ以テ征  
討總督ニ任ゼラレ陸海軍ノ兵ヲ進退スルヲ  
許サレ尋テ隆盛以下ノ官位ヲ剝脱セラレタ  
リ乃チ天兵ヲ擧ケ急ニ大旆ヲ西シ速ニ其渠  
魁ヲ殲シ脅從ハ治スルヲナク以テ 天皇ノ

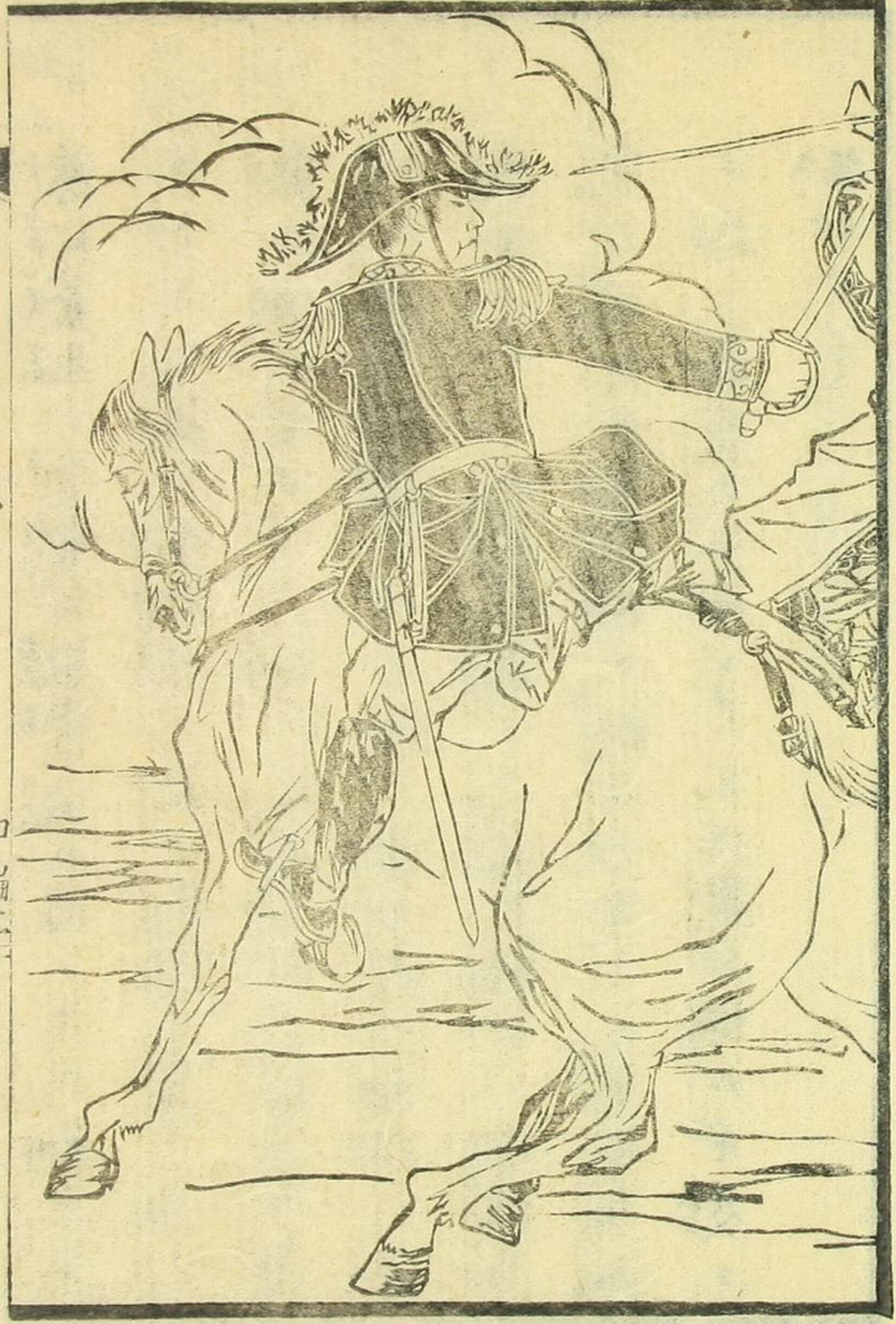
西南平言

四編上二二

下

逆將桐野利秋  
参謀の陣中へ  
馳せ入る

鉄足



慈仁蒼生ヲ愛育ス恩覆裁ニ同シキヲ知ラシ  
 メントス茲ニ今本營ヲ筑ク前州ニ置キ兵ヲ  
 勅シ馬ニ秣カフノ初二當テ王師ヲ動カス所  
 以ノ理ヲ詳説スルヲ斯ノ如シ夫レ海内ノ臣  
 民タルモノ大義名分ノ所在ヲ辨知シ確然自  
 守シ決シテ其方向ヲ誤ルヘカラス苟モ反人  
 ノ為ニ盡惑セラルハアテハ蓋シ悔ル所及  
 無キノミ

明治十年二月二十八日

征討総督二品親王有栖川熾仁

三月十四日夜植木駅小着せ一貴島隊ハ初め謀小與  
 らば本營危一と應援を請ふと再三依頼小就き六  
 百人の兵を集め同十五日の夜ニ織田啓助能勢十九  
 郎ハ二小隊あり百五十人として田原坂の方進撃せ  
 賊徒鳥居巖田中久太郎の兩人ハ官軍の為ニ田原  
 坂小て生捕れり巨魁貴島卯太郎ハ大義名分

るまき 疎暴了然たり 既ふ豊後と根據と一自ら將と  
 あり 西郷へも與せざれば 又薩摩より熊本の方へ  
 繰込たる 人數凡七大隊あり 是へ二百人と一小隊  
 とあり 八小隊と一大隊とす 同日山鹿口へ官軍進んぐ  
 抗戦し 野津少將の軍中を 目掛けて 猪武者の賊將 桐  
 野利秋真先を 進め 恰も 猛虎の勢にて 押寄せし 官  
 軍の 新手と入替り 攻立るよぞ 賊軍の陣營危き 且 桐  
 野の隊も 敗走計り 難しと 本陣より 援兵を 向けよと

告げし 別府邊見の隊に 令と傳へ 馬と催す 所よ 豈計  
 んや 桐野の隊 敗軍とありし ぐ 利秋奮激して 無二無三に  
 打立る 野津少將の 桐野の 真先を 進め 兩將 暫時 斬結  
 処ふ 賊兵 横合より 砲激し 乱軍とありて 立分れ 野津少將  
 曰く 今や 賊勢 甚ぞ 盛ん之若し 之と 接戦せ 味方 死傷 交  
 くり して 利あり 一時 避る こと 肝要と 則ち 八丁計り 退きたり  
 賊軍 益急あり 因て 弟野津大佐の 屢勇 膽を以て 敵の 先  
 鋒を 進んで 戦ひ 官軍 追々 引返して 激戦し 此 時 桐

野の隊必死し戦ひ野津大佐弾丸の中よ腰の邊へ玉疵を受け  
 退きけり又西郷大將の川尻より四里隔て北岡の本陣在り  
 蓋し賊徒馬上より戦地を奔走るまの桐野長山淵邊の三  
 將あり且討死の河野仲五郎山内半左衛門深手を負ひ  
 たる者別府新助あり何れも賊軍の隊長ありて桐野大將  
 の右より出る者ありべしとぞ

西南太平記四編卷之上終

010190507624

